

日本の植物の普及

## 外貨獲得の旗手となった日本の園芸植物

## ユリ根貿易を始めた在留外国人

シーボルトによる日本の植物の普及活動が欧米ではじまる  
と、まずユリの評判が高まり、その需要に応えるため、1867  
年頃には横浜を拠点としてユリ根の貿易を行う在留外国人が  
あらわれました。

イギリス・ヴィーチ商会から派遣されたプラントハンターのマリーズ（1851-1902）は、1877年に来日し、横浜で日本人が経営する植木屋を訪れ、以下のような手記をのこしています。「そこでは、鉢植えのラン類や、素焼きの植木鉢に植えたシユロ、カエデ、ソテツ、シダ、ゼラニウム、バラ、サボテン、マツなどが棚にいっぱいに並んでおり、別の棚には無限の変化をみせたツツジやツバキが並んでいたが、それらはすべて鉢植えであった。ただし、この土地の主要な商売は、ユリを栽培してその球根をイギリスに輸出することである。」（春山行夫著「花の文化史 花の歴史をつくった人々」1980年、講談社、P.532上り）

日本人による園芸植物の直輸出

ルイス・ボーマー（ペーマー）(1843-1896)はお雇い外国人として北海道開拓使に雇用されて近代農業の普及発展に貢献しましたが、1882年に横浜に転居し、ユリ根などの園芸植物を扱う貿易商を始めました。鈴木卯兵衛（1839-1910）を仕入れ主任に雇い事業が拡大ましたが、在留外国人商人を介した輸出のため日本側の利益は薄いものでした。1890年に鈴木は独立して横浜植木商会を設立し、ボーマーの販路を活かしてユリ根の輸出を始め、1893年に園芸植物全般を扱う株式会社へと発展しました。日本に関税自主権のなかったこの時代、直輸出に近い形で厚い利益が得られたのは、日本の殖産興業に理解を示したボーマーの存在が大きかったといわれています。

下3図：横浜植木株式会社「LILIES OF JAPAN」1899年（Biodiversity Heritage Library）左：表紙、中：サクユリ、右：丸葉カノコユリ  
歴史書籍に日本産ユリの多様性を紹介する内容となっています。



上図：マリーズと横浜の植木屋（The Gardeners' Chronicle, Apr 21, 1880年）(Biodiversity Heritage Library)

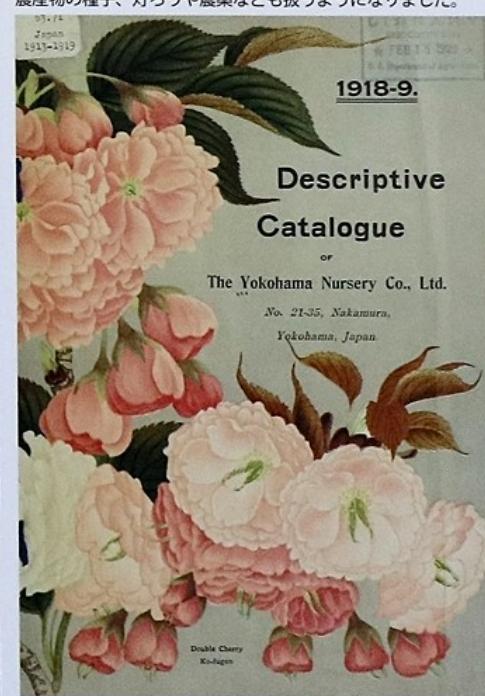
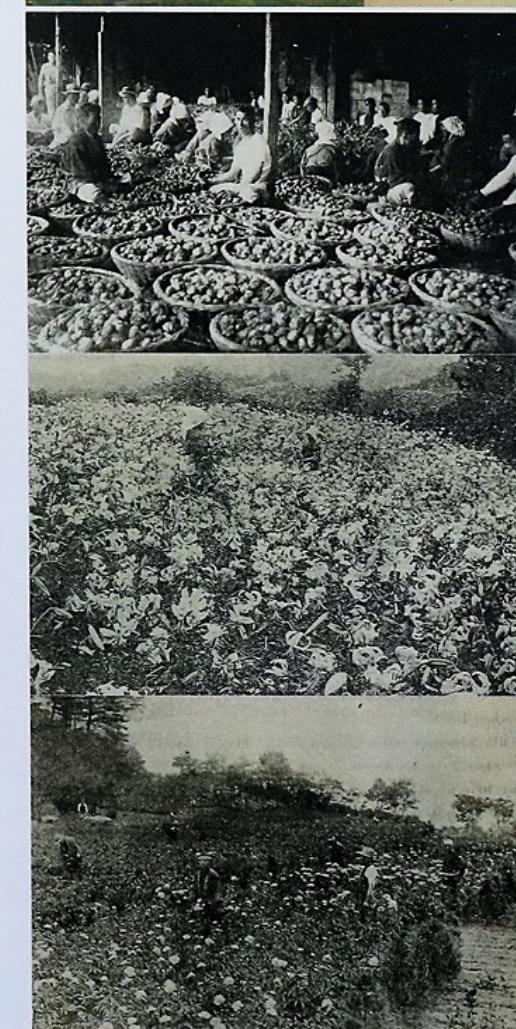


上図：横浜植木商会北米支店 1892 年発行価格カタログ（抜粋）  
(Biodiversity Heritage Library) 取扱商品はユリなどの球根のほか  
サクランボ、ツバキ、カエデなど特にわかつていません。



上3図：横浜植木株式会社海外向け英文カタログ 1898年  
 左：表紙（シナフジ）、中：シャクヤク、右：カエデの園芸品種  
 (*Biodiversity Heritage Library*)

(Biodiversity Heritage Library)  
上の1898年版では、日本産の植物だけでなくボタンなどの中国由来の園芸植物、盆栽や植木鉢などの園芸資材も掲載されています。下の1918年版になると、欧米で育種されたバラの品種、農産物の種子、灯ろうや農薬なども扱うようになりました。



上図・左3写真：横浜植木株式会社海外向英文カタログ 1918年  
上 図：表紙（サクラ）  
左上写真：当時のテッポウユリ球根の出荷状況  
左中写真：当時のカノコユリ生産畑の状況  
左下写真：当時のシャクヤク生産畑の状況